昭和二十二年七月五日　夕刊　いわき民報　（土曜日）　第三百五十九號　（一）

いわき民報

發行所　いわき民報社
平市田町四八番地電一七六番
編輯兼發行人　千輝克己
兼印刷人
日刊　但月曜日を除く
定價一ヶ月十円　一部五十錢

臨時教員養成所設置運動

若き教師連期待を背負つて立つ

盛り止る熱意に

師範を卒業しないいはゆる代用教員連の學力の補充及び教師としての完全なる養成は現下再建日本の礎石として最重要事であると、小名濱第一小學校森山藁君が提唱したところ石城郡教組支部第八方部の全該當者が賛成、これを傳へきいた郡下の該當教員連三百五十名も共鳴したのみか、他の有資格の教師連も双手を擧げて賛意を表し、教組郡支部及び市支部も全力を傾けてこの尊い希望達成に後援することになつたので、一層力を得てこん度臨時教員養成促進運動同盟を結成、郡下十方部から各男女一名ずつゝ委員を選出、この委員中から更に別項の如く役員を決定し來る十三日平市第二小學校に總會を開いて左の如き運動趣旨を發表すると共に、臨時教員養成所の設置を縣に建議陳情する一面、この運動を全縣下に及ぼすのみかひいては全國的一大運動にまで展開させることになつたが、若き教師連の盛りあがるこの熱意は各方面から好感と、大きな期待をかけられている

運動趣旨

吾々助教諭は新憲ぼうの施行、新學制の實施による教育上の重大性に鑑み特に、教育の任を完了するに全く不備無力なるを反省參慮し民主的文化國家建設に必要なる新教育の研究機關として早急に臨時教育養成所を設置することを建議提案しその設置の促進をはかり速かに、教員としての實力を養成し、以つて教諭として教育界に挺身、新日本建設の一翼たらむと決意す

小名濱乙地に昇格か

猛運動効を奏して有望との報告

小名濱町の村格は丙村となつているが、これを定める物價指數からみると乙地の平市より以上のものがあるとあつて同町の官公衙學校が一體となつて村格昇格運動を起し大藏當局等に陳情書を提出中だが更に去る一日來は長瀬助役と青島築港所長が代表となり上京、猛運動中、四日もたらされた報告によると目的達成は確實とのことに町では非常に期待している、萬一乙地に昇格すると公吏等の俸給に一割の國庫補助が與へられることになるので、官公吏教員連にとつては輕視出來ない生活の問題として關心を深められているものである

會長には小山田榮氏

郡下の青年學校も共鳴參加す

別項臨時教員養成所設置問題に對しては郡下の青年學校側も全面的に賛意を表し、擧つて同運動に參加することになつたが、右養成所はこ年中に平、福島、郡山、白河、若松中村に設置、希望者全員を受講せしめるため期間は短期とし受講中の教師は現職にとゞめ修了者に對しては教諭としての資格を與へるといふもので、近く小山田會長外一名が出縣陳情することにもなつている、同運動同盟の役員は左の通り

△會長小山田榮（小名濱第一）△副會長猪狩德松（內郷青年）櫛田たき（上遠野）△書記米澤八重子（小名濱第一）坂本太平（御厩）△會計佐藤弘（小名濱第二）小川孝子（小名濱第一）△總務部長原悟（小名濱第二）△同副部長木田斐子（夏井）國田哲應（好間第一）△交渉部長梅津利光（御厩）△同副部長下山田定雄（上遠野）菊地豐重（小名濱第一）△情報部長高畠裕正（泉）△同副部長薄源重（川部）若松ヨシ（草野）

地事職組の執行委員會

地事職組執行委員會は三日招集、縣單一組合加盟の件について協議した

名稱も縣廳職組石城支部と替へこん月中に陣容をとゝのへて新發足する

鐵工野球

五、六の兩日に

縣鐵工機械工業協同組合主催の縣下工場野球大會濱通り地區の豫選は五、六の兩日、平工、平第三小學校々庭に開かれるが、參加チームはつぎの十一チームではやくも熱戰が豫想されている

◎參加チーム東京鑛機、富士興業、双葉産業、田邊製作、北相機械、豐盛電工、吉伴製作、日星製作、大日本炭鑛、双葉電機、常磐製作

扇丸ほか二隻又進水

きよう華かに四倉造船所で

終戰以來水産磐城の復活を目指して小名濱、江名、四倉、各造船所では新造船に躍氣の努力を重ね素晴しい成績を示しているが四倉造船所で先般來建造中だつた小名濱町白城十郎氏のカッオ船扇丸七十五ㇾ、四倉町新妻春次氏の底曳船善寶寺丸三十五ㇾ、同町佐藤治平氏の底曳船三十五ㇾの三隻が漸くこの程竣工したので四日午前十時から四倉築港で堂々の進水式を擧行、水産磐城に偉力を加へた

學校の夏休

こ年の暑中休暇は郡下中、小學校とも二十一日から八月末日まで四十日だが、この間生徒にとつてはいまゝでにないのんびりした暑中休暇となる

赤井の野球戰

地事チーム對赤井役場チームの野球試合は六日午前十時から赤井第二小學校庭で開へ

總司令部で港を視察

小名濱の廢艦沈設

工事問題有望化す

小名濱修築に重要な役割を占める廢毀驅逐艦の沈設計がくも漸く連合軍總司令部の認めるところとなつて、八日から十日までの間に總司令部から視察に來町する旨役場に入電あつたので町では非常に期待している

郡町村も清掃運動

近く週間を設け

汚れた國土再建にと郡では近く清掃週間を設定、この日を中心として全部に清掃運動を展開することになり計がくをいそいでいる、さきに平市で實施した清掃運動は成果をおさめたので三十二か全町村にも同運動を行うもの

市にも響く料飲店休業

有力財源を失うこと、なつた

市の五月分遊興飲食税は旅館關係を除いても十六萬七千二十二円三十六錢で一か年では實に二百萬四千二百六十四円となり市政運營上の大きな財源であるが五日からの料飲店休業で大きな減收となるため市當局でもこの赤字補充に惱みぬいている

これに對して郡內の業者側では現在の値上げではバランスがとれぬと續いての大幅引上げをのぞんでいる

出廻らない農機具

業者は大幅な値上げを要望

農機具の原價はさきに最高値段從來の七割高の決定をみたので正規ルートによる出廻りと品質の向上が、期待されていたが、その後のじよう況は正規に出廻らないばかりか品質も改良されていないと農家から非難の的となつている、

第二回目の尾崎公判

二十八日に決定

公訴事實にいつさいの犯行を否認話題を投げた故比佐代議士妹殺しの容疑者北海道生れ尾崎德保（三二）にかゝる强盜、强姦、殺人、死體遺棄の第二回公判は二十八日午前十時から平地裁支部で岩住裁判長、鈴木檢察官係りで開廷する

溫泉旅館組合總會

福島縣溫泉鑛泉旅館組合總會は四日湯本町山形屋旅館で開催しこん後の對策等種々協議の末夜は松柏館で懇談會を開いた

いわきサ言

▲助教連の養成所建設運動は御尤至極

▲自ら自己反省する潔き態度はそれだけで一進歩

▲必要な時期に必要なものを配給するこれが第一

▲必要な時期を逸してからの配給が現在の姿とは情なし

▲夢を抱く人間は幸かなだが現在の大衆は夢も追へぬ

▲夢を追うより先づ食を追うのに精いつぱい—

勿來農地問題解決

きょう地事で四時間折衝の末

苗抜き戰までした

土地の反還問題にからんで地主と小作側の苗抜きまでしてせり合つた勿來町字古修地主ひる田光子さん(五七)と小作の錦町天野正夫さん(四二)等ほか錦町農委數名は四日午前石城地方事務所を訪れ解決方を陳情したが四時間にわたるひざつめ談判でさすががんこの地主ひる田さんも農地買收に納得、円滿解決をみた、事件の眞相は地主ひる田光子さん(五七)は水田二反三畝余を錦町農熊太郎さんに小作させていたが、廿年に苗不足のため二畝歩を植へただけで放置していたので町農業會では同町天野正夫さん(四二)に植付けを命じ二十一年度も耕作する豫定であつたところ農さんは小作地を地主に返還、地主は養子の正四郎さん(三二)に作らせることにしたので、正四郎さんは天野さんの了解なしに植付け、ご年も耕作する豫定でいたところ天野さんは自作農創設を去る二月錦町農委に提出、買收計がくを決定してしまつた、これ不滿の正四郎さんは●農委に提訴したが町農委は農繁期の故をもつて放任、この間天野さんは耕作權あるものとして早合點し去る十六日植付けてしまつたが、正四郎さんは田植人夫四名を雇入れ去る廿一日折角植へた苗を全部引き抜き自分の苗を植へ替へてしまつたと云ふもので結局ことしは作付した分を双方で分け合うことに決めたもの

失業者ざつと三千名

料飲店休業の大施風の余波

五日からいつせいに實施される料飲店休業で影響をうける郡下の業者はざつと千二、三百名とみられているが平警管內の業者は三百八十六名で藝者、給仕婦、接待婦三百四十五名を加へると七百三十一名その他關係者をふくむと實に三千名近くの失業者が出ることになる、いまゝで炭鑛、漁場は何らかの考慮がはらわれるものとみられていたのもすべてまかりならぬとなつて旋風をまへに業者はいづれもお先まつ暗となつている

業種別にみると普通料理店三一、カフエー一八、特殊料理店六五、飲食店二五五、藝者置屋一五、喫茶店二、計三八六軒あり、これに從事しているものが藝者五〇名、給仕婦二六名、接待婦一六九名で市町村別にみると平が普通料理店二六、カフエー五、飲食店九〇、喫茶二、特殊料理店一三、藝者置屋一五で接待婦四八名給仕婦五名、藝者五十名で藝者置屋、喫茶店は平市だけである、平に次ぐのが小名濱町で普通料理店一、カフエー七、飲食店三六、特殊料理一九、接待婦六五、給仕婦一五となつており湯本は普通料理二、カフエー六、飲食店三一、特殊料理八、接待婦一六、給仕婦六で四倉町は普通料理一、飲食店一〇、特殊料理五、接待婦一五、內郷町飲食店二五、特殊料理七、接待婦四江名は飲食店一五、接待婦一七名となつている

稻の管理に御注意

除草や追肥を怠るな

農業會石城支部では中旬までの稻の管理についてつぎのように注意を促している

稻には七月いつぱいが大事で特に十五日ごろまでの分けつ如何が左右するから早目に一番除草をやつて田の土をよくかきまはし水は淺目にして溫度の上昇をはやめ分けつを促ずようにしなければならない、基肥が不足しているところでは稻の色をみて窒素質肥料の追肥をする石灰窒素を使用する場合は十倍ほどのしめつた土にまぜて十日ぐらい堆積しておいたものをもちいるようにする、しかし天候が不順となり冷害を豫想される場合には窒素肥料の追肥はひかへた方がよい

隣組廢止に 市でも悲鳴

町內會隣組の廢止にともないこれに代つて市役所內に店開きした出張所はさて開業してみればあれやこれやと悩みはたへず市當局でも頭を痛めているが、現在のところ收入しよう明だけでも窓口を叩くひとがざつと五十人、これを受理する人はたつた二人、たすけてくれーと應援をもとめている

驛前の野外 ダンス中止

米國の獨立記念日を祝ふ意味で平市驛前で屋外ダンスパーテーを四日夜開く豫定の處主催者側へ交通保安上どうかと云ふ注意もあつたので中止する事になつた

生活品展示會

よい品をより安くと縣生活用品會社の展示會は四日午前九時から常銀支店樓上に開き、人氣を呼んだ

案內所設置 急速に着工

樺太方面を始め昨こんいちじるしく引揚者が增加したので海外引揚者磐城連盟では平驛前に案內所の新設を計かく猛運動中だがこん度際の建築認可など待つていては間に合わぬと齊藤角治市議の利害をはなれての俠氣に頼り即時着工することに決定した

生きた勉强

學校の夏季休暇が迫つたが若き學徒のなかには、この休暇中を無爲に過すことは許されない、この余暇を利用し生きた社會を學ぶとゝもに幾分でも不足がちな學資を稼ぎ出そうとするものが少くなく、二日は平職業安定所に休暇中だけ働き得る輕勞働の就職を求めてまた帝大生、福島經專生及び日大生が各一名ずつあつた、同所ではうれしい傾向だと喜び直に斡旋することになつたが、これからはかゝる學生の求職も多いのではないかとみて同所では臨時的に休暇學生の就職斡旋にも乘出すことゝなつた

主食糧の縣外移出

市配給課では主要食糧の縣外移出は就與の場合病人の異動、其の他緊急やむを得ぬ場合にのみは移出しよう明書を交附するからと市民の周知方を望んでいる

映畫紹介 大江戸の鬼 八日から世界館

疑惑と戰慄におのゝく大江戸の夜名人傳七の眼は鋭く鬼女の面は街におどる—荻原遼の監督で、安本淳のカメラといつた東寶作品—

配役

稻田屋傳七 大河內傳次郎
淸七 長谷川一夫
遠山金四郎 黑川彌太郎
おなつ 高峰秀子
おしま 宮川五十鈴
赤鶴彥兵衞 上山草人
堀池玄雪 汐見洋
雪持丹三郎 田中春男

ものがたり

—大江戸八百八町、人の氣もない暗闇の中に人影がうごき走り去る。無氣味な江戸に殺人事件が次々と起る。

この無氣味殺人事件を一刻も早く解決しようと北町奉行遠山金四郎は與力達を集めてきびしく申渡した。

—それをあざけるかのやうにご宵も亦、犧牲者が一人—

この事件を必死に解決しようとしてゐる御用聞の一人稻田屋傳七といふ太つ腹な親分がゐる。

傳七はこの事件の裏に何か怪奇な姿を直感した。兩國の見世物小屋の樂屋には、これ又街のならずものゝ一團に取り卷かれた昔の仲間で淺島歸りの淸吉が無精ひげを生やして新顏の黑船達にひき合はされてゐる。淸吉は江戸で名高い堀池玄雪といふ能役者の一人息子だつたのだ。

この堀池家には先祖から傳はる稀代の名作で人手に渡ると魔性を現はすといはれている般若の面がある。それが先日來何者かの手で粉失していることを發見した。堀池家ではこの面で將軍家御所望の舞ひ納めの期日の迫つてゐることで必死になつて傳七に搜索方を依頼して來た。

それは寶の所淸吉の昔仲間猪之松がぬすみ出して兩國の古道具屋五文屋に一分賣りとばしてしまつたのだつた。

その日兩國の人混みの中で淸吉は浪人雪持丹三郎が能面師赤鶴彥兵衞の一人娘おなつにわざと突當りおなつのかんざしを、とつてしまつたのを見て、雪持より取上げおなつへかへしてやるのだつた。

このことがあつてから、おなつの娘心の奥に淸吉の姿が濃く印象づけられ淡い戀心をいだくやうになつた。

ある夜—又一人犧牲者が出た淸吉は赤鶴の家の附近で通り魔のやうな怪奇な男の姿を見て、その後を追つて遂に殺人現場を見てしまつた。

それは恐しい般若の面の走る姿であり、その面を取り落した顏、それは赤鶴彥兵衞の恐ろしい形相の顏だつた。

無氣味惡い夜の空—大江戸の家並は、闇の中に閉されている。そして赤鶴は何者かに依つて疑惑の死を遂げてゐるのを目擊した。

淸吉は彥兵衞の懷中から般若の面と覆面のきれを取つてにげたが遂に捕へられ、このれつきとしたじよう據物件の爲身の明しを立てることが出來なかつた、おなつは戀人淸吉がよもやと信じているので、その解決を傳七に泣いてたのむのだつた。

傳七は赤鶴の死體の側から拾つた印籠が浪人の雪持丹三郎の持物であることから淸吉の無實の罪を明らかにしてやつた。

それから數日、うらゝかな春の日に利根川に釣竿をたれている二組があつた。傳七、おしま夫婦と淸吉とおなつの二組の幸福な姿が水にうつゝている。